

覚え書

飛行機物語

山内武麒

贊助委員 佐伯市山手区

佐伯に初めて飛行機が来たのは、大正の初めてであった。今から五十数年前のこととて、私がかまど小学校の五、六年頃だつたと記憶している。

本まゝの飛行機が来たのである。しかし空から飛んで来たものぢやない。その頃はまだ鉄道が開通してはなかつたから、薩から運ばれて来たものであるまい。多分汽船に積まれて来たものに違いない。そして組立てられて見せるとして来たのである。佐伯小学校の校庭で、見料を取つて見せたのである。

その当時、飛行機が来るやうな広い場所といへば、小学校の校庭より他になかつたのである。私も誰かに連れられて見に行つた。校庭の北の隅に野球のバツリネットを張る場所があつた。その附近から、現在、講堂が立つてゐる所に小使さんの居る棟があつたが、その前まで滑走して走らせ、機首を迴旋してまたもとの所へ滑走して戻るのである。型は何というのか覚えていないが、上下に翼のある所謂複葉の陸上機で車輪がついてゐた。一人の操縦士がいて、先ず飛行機の説明をして、エンジンをかけプロペラを回して滑走するのである。それを金と拂つて見たのである。本当に空を飛べる飛行機であつたかどうか知るよしもないが、形だけは本まゝの飛行機で、しかも人が乗り爆音をたててプロペラを回し、砂煙と

おけて滑走するのを見たいから、きつと感動したために違ひない。今でもこのことをきけばつきり覚えてゐる。

この飛行機を見た翌年か翌々年に、今度は空を飛んでゐる実物の飛行機を見たいのである。海軍の水陸飛行機が演習のため、大入島の白浜に来たのである。初めて空を飛ぶ飛行機が来たのだから大変であつた。佐伯の町の人達は勿論、近郊近在からおんざりわんざり飛行機見物に白浜へおしかけたのである。五月が六月の頃で、雨がよく降る季節であつた。

私が佐伯中学校へ入学して間もない頃であつたと記憶してゐる。一日、学校は全校生徒を引率してこの飛行機を見学に出掛けしたのである。空は曇り今日も雨が降り出し、その空模様であつたが、生徒一同は大喜びで傘も持たずに出発したのであつた。その頃は今のようなポンポン船の渡海船はなく、曹長からその当時毎日定期便で寄港してゐた大飯行の汽船に乗り降りする客も荷物を運ぶ大きな通い船とやつて、大入島の一番近い守後浦の浜まで渡してもらつた。その頃の佐伯中学校は全校生徒といつても僅かに二百人足らずであつたから、渡してもらつたにも造作があつたのである。守後から白浜までは、今のような道路はなく幾つもの坂を越して行かねばならなかつた。久保浦を通り坂切の方へ廻れば遠回りになるので、一番近道をとつて、人おめつたに運らぬ石間の上の高い山を越して白浜へ行つた。

白浜へ着くと飛行機が海辺の砂浜に、機首を沖へ向け、二機であつたか三機であつたかその数は覚えてないが、胴体に赤い丸をおびたか、赤い丸の複葉機で、おびた水陸機であつた。胸をおどらせて飛行機のそれに集まりめづらげに見たい

である。中学生の見学というので飛行服、身をかためた若い海軍士官が色々と説明してくれた。どんな話であつたか全く覚えていないが、私どもは、おこがれと好奇の眼とかがやかせながらこの士官の話と聞いた左に違いない。いつ飛ぶかと、飛行機の飛び立つのを、今やおもしろく待っていたが、生憎と雨が降り出した。雨のをめ予定された飛行は出来ないと聞いて私どもはがっかりした。この当時は雨が降ると飛行機は飛ばさなかったらしい。午後になつて雨が止れたら飛ぶというので待つことにした。午前中で帰校する予定であつたので誰も辨当を持って来ていない。致し方なく白浜と竹ヶ谷の民家に頼んで甘藷をふかしてもらい、それと昼食にして午後を待たが、雨は益々ばげしくなり、とうとう飛行機は飛ばすまいに終り、私どもはわずぬれになつて帰つたのである。

私はこの後二三日して家のもの達と改めて白浜へ行くと、飛行機が爆音高く白波をけつて海面を滑走し、空に飛翔して行く光景を眼のおらりに見て心から満足した。

このことがあつて間もなく、毎年夏になると、聯合艦隊は佐伯湾をうづめつくし、飛行機は朝から晩まで絶えず佐伯湾上空を飛ぶようになった。昭和になつて佐伯海軍航空隊が設置され、飛行機と佐伯とは切っても切れな心深い縁が結ばれて昭和二十年の終戦まで続いたのである。この間に飛行機にかかある数多のエピソードがあるが、悲惨な話が次々と憶い出されてくる。

何はともあれ、現在の航空界は長足の進歩を遂げ、人智の及ぶ限りの科学の粋をおつめてゐるが、五十数年前、少年の頭好奇の眼で見た昔の飛行機のことを憶ひ浮かべると、まるで夢のようである。今更ながら今昔の感に堪えない。

(おわり)

研究

毛利高政の系譜について

佐 脇 貫

會員・佐伯市津志河内

叢祖從五位下民部大輔藤原朝臣高政后及伊勢守・氏森尾州之産也。其性貞悍雄偉。少而仕太閤秀吉公。天正十一年四月二十一日於江州志津殿、秀吉公與柴田勝家一戰時、遂敵挑戰自傷矣、其餘每臨軍無不得利也。同十五年賜豐之後州隈城及秋祿式方斛、文祿年間朝鮮征伐之時、從命為軍監在陣經年、始還兵於肥州名古屋謁秀吉公、公感賞其忠、欲而遣豐州日田、攻珠二郡吏之也。再涉朝鮮由南原之城陷之、且於水營之瀨先諸將與大羽番船忿擊而自探戈、追討敵兵、武成於異城、本邦秀吉公應賞勇猛而厚賜或書勳勳、慶長六年四月五日因未照宮之命、辭隈城而遷州州海部郡佐伯庄、築城於鶴屋居之。慶長十九年冬根州大坂陣之時、屬東照宮之命於備前島、京橋市中以計策悉有功、翌年夏再請開東御出馬之告而出帆於佐伯、五月七日到大坂拜謁東照宮、台德院殿、元和一統之後世奉仕將軍家也。

寛永五戊辰年十一月十六日、於武陽卒春秋七十歲、年終外紹元。嗚呼大哉、高祖余烈以長壽子孫之後、我苟統箕裘慕慕之不歇、於茲新造立靈廟謹誌之。

宝永四丁亥年十一月十六日

從五位下周防守毛利氏藤原朝臣高政

これは養賢寺境内にある毛利家墓地の始祖高政廟記で